

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04813

研究課題名(和文) 青年期発達障害者の自尊感情の安定性とwell-beingに関する心理学的研究

研究課題名(英文) Stability of self-esteem and subjective well-being of adolescents with developmental disabilities

研究代表者

小島 道生(kojima, michio)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：50362827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：青年期自閉スペクトラム症者の自尊感情とwell-beingについては、同年代と比較して違いはないことや自尊感情とwell-beingは関係していることが示唆された。したがって、自尊感情を高めることがwell-beingの向上にもつながる可能性が示唆される。また、青年期自閉スペクトラム症者の自尊感情とwell-beingの源泉については、他者と比べての失敗あるいは成功経験が影響していること、孤独感がwell-beingに影響する重要な要因であり、学校などにおいて孤独感を抱かないように支援していくことの重要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

青年期発達障害者の自尊感情とwell-beingという内面世界の研究により、基礎的な研究知見が明らかにされ、当事者が幸福感を抱きながら生きていくための支援の在り方について、知見を得ることができた。孤独感を抱かないように、仲間関係を支援していくことや趣味をもち、身近なことで幸せを実感できるようなかかわりや伝え方を行っていくことの重要性が示唆された。また、支援プログラムを試行したが、自尊感情は短期間での変容は難しかったが、自己理解が深まり、当事者自身が有益であったと実感できた内容が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The results indicated no significant differences in self-esteem and subjective well-being scores between individuals with and without ASD. The results of this study indicated well-being and self-esteem might be correlated in ASD adolescents as well. To improve self-esteem in ASD adolescents would increase their well-being. It was concluded that experiences of success and failure, comparison with others, and loneliness could affect the subjective well-being level also in ASD adolescents. Support for facilitating interactions with others in schools is required to stop loneliness in ASD adolescents.

研究分野：特別支援教育

キーワード：発達障害 青年期 自尊感情 well-being

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

青年期発達障害者を対象としては、自尊感情について障害種別に障害のない同年代との比較から検討されるとともに影響要因なども示されてきた。しかし、自尊感情の心理学的な研究からは自尊感情が高い、あるいは低いということだけでなく、むしろ自尊感情の安定性を考慮すべきであると指摘され、仮に自尊感情が高くて不安定であると安定している人よりも怒りや敵意を抱きやすいことや抑鬱傾向が高いといった研究が示されている (Kernis ら, 1991)。青年期は、自尊感情が揺れることが多いとされている (溝上, 1999) が、発達障害者を対象とした自尊感情の安定性について検討した研究はみられず抑鬱との関係なども未解明である。

さらに、自尊感情と密接に関係のある概念として、近年、心理的 well-being が注目され、我が国においても心理学の立場から実証的な研究が展開されている。well-being とは、人間が心理的に最良の状態に機能していることである。そして、自尊感情が心理的 well-being を促進すると指摘 (伊藤・小玉, 2005) されるなど両者は極めて密接な関係であり、心の評価的・感情的側面における中核と言える。そのため、我が国においても自尊感情と well-being を扱った研究が急速に展開されてきている (例えば、水谷・雨宮, 2015)。くわえて、近年ではポジティブ心理学の展開により、人間の持つポジティブな側面や機能の研究を応用した研究が増加し (Sin & Lyubomirsky, 2009)、well-being への介入も試みられている (例えば、Seligman ら, 2005)。

しかし、青年期発達障害者の自尊感情の安定性や well-being については、その実態すら明らかになっていない。こうした研究の遅れは、発達障害者の内面世界、ひいては本人の幸せへとつなげる心理的な支援に関して十分な知見が得られていない証と言える。青年期以降、充実した生活を送るためには安定した自尊感情とともに本人の well-being への支援が求められよう。本研究では、心理学における自尊感情と well-being という心の評価的・感情的側面の中心となるテーマについてアンケート調査による量的データの統計処理、面接調査等と事例への介入といった多様な方法論を用いたアプローチにより検討する。

## 2. 研究の目的

本研究は、まず青年期発達障害者の自尊感情の安定性と well-being の特徴について縦断的研究と横断的研究により明らかにする。横断的研究では、同年代の対象者との比較を通して、特徴を明らかにする。次に、自尊感情と well-being の影響要因について面接調査などから明らかにする。そして、プログラムの開発を試み、介入効果の検証を通して自尊感情と well-being に対する効果的な支援の在り方について明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、主に三つの方法から試みる。まず、第一に青年期発達障害者の自尊感情の安定性と well-being の特徴及び関係性に関する研究に関するアンケート調査を縦断的及び横断的に実施する。青年期発達障害者の横断的研究においては、同年代の対象者との比較から、自尊感情及び well-being の特徴を明らかにする。第二に、青年期発達障害者の自尊感情の安定性と well-being に影響を与える要因の検証として、面接調査などを実施し、自尊感情と well-being に関する背景理由などを探り、介入方法開発に向けての知見を集約する。なかでも、自尊感情と well-being の質問紙にかかわる解答理由の分析や源泉について調査を実施し、影響要因について追究していく。また、プロフィール要因についても分析を行い、発達のな変化や現在の所属などの影響についても検討する。第四段階では、これまでの研究知見と先行研究を参考にして、青年期発達障害者の自尊感情の安定性と well-being に対する介入方法の開発・検証を行う。小集団で実施可能なプログラムの作成を試み、事前・事後の調査などから、その効果を検証する。

## 4. 研究成果

青年期発達障害者の自尊感情と well-being に関する 3 年にわたる縦断的研究からは、以下の点が明らかになった。縦断的研究において、中学生、高校生、大学生においては、自尊感情の動きが社会人に比べて大きかった。社会人においては、就職の状況によって自尊感情と well-being が大きく変動する場合もあるが、概して安定しており、変動がみられない対象者がほとんどであった。少数であったため、一定の傾向を見出すことは難しいが、中学生、高校生、大学生など学校に所属している ASD 者は社会人に比べて自尊感情と well-being は不安定であり、将来に対する不安などが影響していると考えられる。また、学校においては、友人関係などに悩みを抱えている様子もうかがえた。今後、より大人数を対象として検討していく必要がある。

横断的研究として、青年期 ASD 症者 (27 名) と同年代 (60 名) の対照群を対象とした自尊感情と well-being に関するアンケート調査を実施した。その結果、自尊感情と well-being に違いはなかった。ただし、ASD のある学生の自尊感情や主観的幸福度は、社会人に比べて低い可能性が示唆された。これより、大学などの高等教育機関に所属する ASD 者の支援において自尊感情や well-being にも配慮しながら支援の在り方を見つめ直していくことが重要であると考えられた。そして、ASD 者と対照群に共通して、自尊感情が高いと well-being も高くなることが示唆された。なお ASD 群を群わけして分析を行ったが、やや少人数であり、個人差の影響した可

能性もある。そのため、今後対象者の人数を増やして検討していく必要がある。また、分析対象となった ASD 者及び対照群では学生、社会人など所属が明確になっており、ASD 者については発達障害に関連する親の会に所属している対象者に限定されていた。したがって、研究結果は親の会に所属している対象者に限定されていることを考慮しておく必要がある。なお、本研究成果は、LD 研究 27 巻 4 号に掲載されている。

青年期 ASD 者を対象として面接調査を実施した。ASD 者からは、家族関係や友人関係などの対人関係にかかわる言及は少なく、自尊感情や well-being においても定型発達者よりも偏りがあることが示唆された。また、中学生や高校生は成績が自尊感情と well-being に影響していること、さらには孤独感が自尊感情や well-being に影響していることが示唆された。したがって、対人関係において孤独感を抱かないように支援していくことの重要性が明らかとなった。

さらに、ASD 者の主観的幸福感には自尊感情と密接な関係があること、高校生は主観的幸福感が低いものの、社会人になると高くなる可能性があることが示唆された。また、高校生や大学生などの学生においては、不安や心配といったネガティブな感情が主観的幸福感に影響を与えているのに対して、社会人になるとポジティブな感情や考え方が影響を与えていることが明らかとなった。そして、いずれに所属している ASD 者にとっても、多くの人にとって趣味が幸福の源泉となるため、学齢期の頃から趣味を見つけ、生涯にわたり楽しめるような機会を確保することが、主観的幸福感を高めると考えられる。また、社会人になると経済的な豊かさも重要であり、学生とは源泉が異なる傾向が明らかとなったが、これらは障害のない人々と類似していると考えられた。

今後の課題として、面接調査では主観的幸福感の尺度について、ASD 者にとっても理解しやすく、また高校生でも回答可能と判断される 9 項目を採用して検討した。しかし、主観的幸福感をどの程度の正確に測定できたかは不明であり、また ASD 者にとって回答しやすい質問項目であったかも検討の余地が残る。したがって、日本における高校生から成人期までの ASD 者を対象とした主観的幸福感尺度の開発が必須といえよう。また、本研究では年齢が高くなると「自信・達成感」の因子が低くなることが示されていた。年齢が高くなると、特にものごとが思ったように進まない場合に、適切に対応することは難しいという判断が行われるようになり、低くなっているのかもしれない。ただし、本研究からはその原因が明確にはならない。今後は、ASD 者の年齢が高くなるにつれて自信や達成感を低下させている原因について明らかにしていく必要がある。

青年期発達障害者を対象とした自尊感情と well-being を高めるための支援プログラムの開発を試みた。そして、開発したプログラムを発達障害者に対して試行し、自尊感情や自己理解に関するアンケート調査などを通して、事前・事後の比較からプログラムの効果を検証した。プログラムは、小集団で他者と交流しながら、自尊感情と well-being を高める活動を設定した。プログラムは、およそ 5 つの段階に分かれており、事前・事後において自尊感情と well-being を測定するとともに、事後調査ではプログラムの内容についても評価を行い、当事者にとってどのような影響を及ぼしたのか、検討することにした。プログラムは、およそ約 60 分の活動を 5 回実施した。その結果、参加した発達障害者は他者とかわりながらプログラムに取り組むことで自己理解が深まったことやプログラムの内容が自分にとって役に立ったと実感していることが明らかとなった。ただし、自尊感情の向上はみられなかった。したがって、開発したプログラムでは、短期間での自尊感情の向上は難しかったが、他者とかわりながら取り組む活動内容が自己理解の深化につながることを示唆された。参加した対象者からは、プログラムの評価は肯定的であったことから、より長期期間、継続的に実施して、効果を検証していくことやプログラムの内容を精選していくことが今後の課題といえよう。

本研究全体を通して、青年期発達障害者、主に ASD 者の自尊感情と well-being の特徴、そして影響要因などについて明らかにでき、一定の成果があげられた。また、青年期発達障害者を対象とした自尊感情と well-being に関するプログラムを開発・試行し、短期間での自尊感情や well-being の向上は難しかったが、当事者にとっては有益であったという解答がえられており、内面世界への支援につながる手がかりを得ることができた。今後さらに内容を精選し、自尊感情などの内面世界の変容にかかわる方法論を追究していく必要がある。

## 5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

- ・小島道生.(2018)自閉スペクトラム症者の自尊感情と主観的幸福感. LD 研究,27(4),491-499. 査読有り

[学会発表](計 8 件)

- ・Kojima Michio(2018)Sources of subjects well-being in adolescents with ASD. 40th Annual Conference of the International School Psychology Association. 査読有り
- ・小島道生(2018)自閉スペクトラム症者の主観的幸福感とその源泉. 日本発達障害学会第 53 回研究大会発表論文集, 148. 査読無し
- ・Kojima Michio(2017) Preliminary study of self-esteem and subjective well-being in persons with autism spectrum disorders. 2017 IASSIDD 4th Asia Pacific Regional Congress. 査読有り

〔図書〕(計1件)

小島道生(2019)青年期発達障害者の自尊感情の安定性と well-being に関する心理学的研究. 文部科学省科学研究費研究成果報告書, 63 頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。